

汽水域研究会 NEWS LETTER

第14回佐賀大会開催報告

汽水域研究会第14回佐賀大会開催報告



有明海巡検の一コマ 撮影:倉田健悟

2022年11月12・13日に佐賀にて汽水域研究会2022年（第14回）大会が開催されました。コロナ禍でじつに3年ぶりの現地での対面開催となりました。46名の参加者が集まりました。初日は「有明海の干潟」をテーマとした巡検をおこないました。気温25度を超える季節外れの暑さの中でしたが、参加者一行は鹿島市干潟交流館や東よか干潟ビジターセンター「ひがさす」などを巡りました。有明海の広大な干潟や、そこに生息する生きものを観察しました。翌13日は、あいにくの雨模様となりましたが佐賀大学に会場を移して、「有明海：広大な浅海域の生態系と産業」と「閉鎖性の強い汽水域における人為改変による環境変化と生態系の変化」をテーマとした2つのシンポジウム、25件の一般ポスター発表が行われました。2つのシンポジウムでは有明海をはじめとする閉鎖性の強い汽水域の環境や生態系を考える良い機会となりました。また、一般ポスター発表についても学部生や大学院生による発表が多く、非常に活気ある議論が行われました。佐賀大学、鹿島市干潟交流館、「ひがさす」の皆様には、大会実施に向けて支援・協力いただきありがとうございました。



佐賀大会の様子（左から：シンポジウム、ポスター発表、巡検時の干潟&いきもの観察）

撮影：山田和芳、倉田健悟

汽水域研究会第11回例会（汽水域合同研究会2023）開催報告

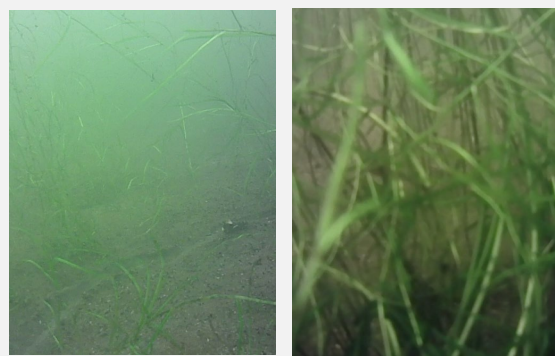
毎年新春恒例となっている島根大学エスチュアリー研究センター(EsReC)第30回汽水域研究発表会と汽水域研究会第11回例会の合同研究発表会が2023年1月7・8日にオンラインと対面（会場：島根大学）を併用したハイブリッド形式にて開催されました。2日間でのべ189名の参加がありました。シンポジウム「宍道湖における水草繁茂の研究」には4つの特別講演、「水圏生態研究」「汽水域一般」「環境変動解析」「流動解析」に区分される常設セッションおよび「完新世環境変遷」と題したスペシャルセッションにはあわせて36の一般講演が発表されました。

今大会の大きなトピックとして、福井県立若狭高等学校と島根県立安来高等学校による高校生研究発表がありました。どちらも大学レベルのすばらしい研究内容であり「発表賞」として顕彰されました。汽水域研究会のすそ野の広がりを感じることができました。



高校生発表の様子（左：若狭高校の生徒さん、右：安来高校の生徒さん） 撮影：金 相暉、瀬戸浩二

今大会の特徴として、宍道湖の水草問題についての研究が挙げられます。この10年ほど宍道湖湖岸域において水草が大量繁茂して悪臭をもたらしたり、特産のシジミの生育に悪影響を及ぼしたりするなど深刻な問題になっていることを受け、シンポジウムでは水草繁茂に関する様々な分野からの最新の研究成果が報告されました。一般講演においても関連する研究が多く発表され、社会的関心が高い課題について研究が精力的に進められています。参加した聴講者らも活発な意見交換をおこなっていました。



宍道湖の水草大量繁茂の様子
2020年6月（左）、8月（右）の水中カメラ映像
提供：倉田健悟

学生賞報告

汽水域研究会第11回例会 学生賞授与

汽水域研究会では優秀な若手人材の育成と学生の研究意欲向上を目的として、「汽水域研究会会長賞」と「エスチュアリー研究センター長賞」を優秀な発表を行った学生に授与しています。第11回例会においては、以下のとおり受賞者が決定しました。2023年2月16日にエスチュアリー研究センター長室にて授与式を行いました。入月会長からは全員に対して「この素晴らしい成果を是非論文にしてラグナ（汽水域研究会の研究紀要）に投稿頂きたい」と激励の言葉が向けられました。

今回「汽水域研究会会長賞」を受賞したのは、ともに島根大学大学院自然科学研究科の中村和磨さん、岡田琢己さんの2名、「エスチュアリー研究センター長賞」を受賞したのは島根大学総合理工学部の田中陶子さん、島根大学大学院自然科学研究科の白井大喜さんの2名でした。受賞されたみなさま、おめでとうございます！

汽水域研究会会長賞

中村和磨さん

島根大学大学院 自然科学研究科

「ヨシエビの閉鎖循環式陸上養殖における水質管理基準の検討」

(中村和磨・山口啓子) 得点：21.3点

「昨年度に引き続き、新春発表会で学生賞をいただけましたこと、大変光栄に思います。ご指導いただきました山口先生や、研究室の学生の皆様はじめ、多くの方々のご協力があったからこそのものだと思います。この場をお借りしてお礼申し上げます。私自身は今年度で大学院を卒業することとなりますが、山陰地方での就職の予定でありますので、この地域の汽水域生態系の保全や水産業の発展に今後も寄与したいと考えています。この度は本当にありがとうございました」

岡田琢己さん

島根大学大学院 自然科学研究科

「汽水域に生息するミナミメダカの成長およびIGF1の発現に対する塩分の影響」

(岡田琢己・山口陽子・山口啓子) 得点：18.5点

「この度は、このような栄えある賞をいただき、誠にうれしく思っております。メダカの研究を始めて3年になりますが、今までの努力が報われたように感じています。ご指導いただいた山口啓子先生や、ご協力いただいた山口陽子先生、そして、研究室の皆様へ、心より感謝いたします。卒業後はこれまでとは異なる分野での就職となりますが、研究活動で身につけた能力を活かし、邁進してまいります」

エスチュアリー研究センター長賞

田中陶子さん

島根大学 総合理工学部

「簸川平野から得られた完新世コアを用いた宍道低地帯中央部の古環境変遷史」

(田中陶子・瀬戸浩二・香月興太・齋藤文紀・中西利典) 得点：18.6点

「この1年間、瀬戸先生の下でコア切りや宍道湖の調査など様々な経験をさせて頂きました。毎日が勉強の日々で、充実した研究生活を送ることができました。汽水域合同研究発表会に参加させてもらったことで、新しい知識を得ることができました。最後にこのような立派な賞を頂くことができ光栄です。本研究を進めるにあたり、お世話になった全ての方々に感謝いたします。来年度から大学院に進むので、これまでの経験を活かして精進していきたいと思っております」

臼井大喜さん

島根大学大学院 自然科学研究科

「塩分がミナミメダカの仔魚の出現開始時期に及ぼす影響」

(臼井大喜・田久和剛史・松田烈至・山口啓子) 得点：18.5点

「大変嬉しいです。山口先生や研究室の皆様のおかげで受賞できたので感謝を忘れず、あと1年引き続き研究に励みます。まだまだやることは山積みですので、来年度の研究活動にも一生懸命努めていきたいと思っております」

※学生賞対象発表者の平均点は17.2/25点満点でした



全員で記念撮影(左から瀬戸准教授、齋藤エスチュアリー研究センター長、田中さん、臼井さん、中村さん、岡田さん、山口教授、入月汽水域研究会会長) 撮影：船来 桂子

関連学会(大会)紹介

◆ 第10回東アジア生態学連合 (EAFES)

会期：2023年7月17日～20日 4日間
形式：対面 場所(会場)：済州島(韓国)
詳細：<https://www.esj.ne.jp/esj/EAFES/eafes10.html>

◆ 日本地球惑星科学連合2023年大会

会期：2023年5月21日～26日 6日間
形式：ハイブリッド(現地+オンライン)
会場：幕張メッセ(千葉県)
詳細：<https://www.jpogu.org/>

※日程および開催形式は変更となる可能性もあります。詳細HPをご参照ください。

コラム

小説にみる汽水域

エコフィクションという言葉をご存知でしょうか。ここ数年新しい文学ジャンルとして認知されはじめています。それは人間と自然の関係を主題として扱う小説(創作)のことである。

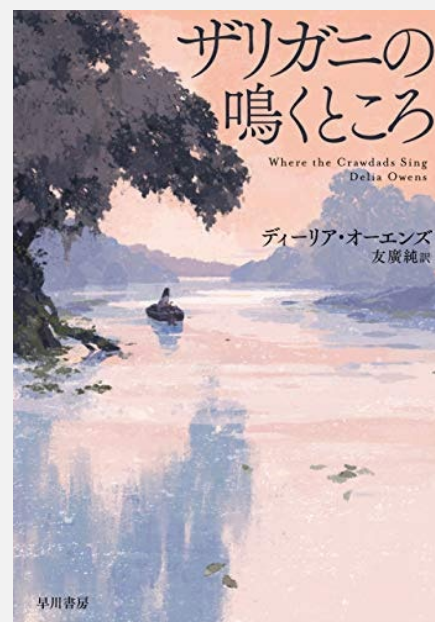
その分野を一躍有名にした本ーディーリア・オーエンズ(著)『ザリガニの鳴くところ』(2018年刊行)は、2019-2020年期中にアメリカでもっとも売れた本となった。日本語訳もほぼ同時期に出版され重版を繰り返している。しかも昨年末には映画化(日本語版吹替もあります)もされた。

本書は1950～60年代の米ノースカロライナ州の湿地帯が舞台となっているミステリー／ラブロマンス小説である。当時のアメリカ社会が色濃く映し出され、“the marsh girl(湿地の少女)”と陰口をたたかれ蔑まれる主人公が変死体の容疑者として疑いをかけられ、陪審裁判されていく過程が描かれている。低湿地を舞台にして今日でも根強く残る貧困や差別といった社会問題を考えさせるものである。

この本の特筆するところは、湿地、沼地、水鳥、小動物、昆虫、貝、花など低湿地帯の自然描写(風景や生きものもすべて)が精巧になされていることである。汽水域というフィールドを経験したことがある私は読み進めていけばいくほど、湿地特有の匂い、肌にまとわりつく湿気、鳥など動物の鳴き声などが記憶からよみがえった。そして一気に読了してしまった。さらに、動画配信サービスで映画も見てしまった。なぜこのような衝動にいたってしまったのかと突き詰めたら、この本の著者は動物生態研究者であった。とくに湿地の環境保全を推進する研究者であり、汽水域の自然のすばらしい表現方法が無理なくできることに合点がいった。ぜひ会員のみなさんにもこの本を通じて汽水域を感じてほしいと思っている。

これまで研究者が書く本はノンフィクションが常識である。しかし、今の時代、すなわち自然環境と私たちの暮らしを再考しなければならない人新世という時代には、万人が自分事として考えられるようなフィクションにする視点も重要なものかもしれないと感じる。

エコフィクションは環境問題のみならず自然災害などを取り扱い現代における社会問題を照らすものも多い。これから日本人による同様のジャンルの本が登場することを期待してやまない。いや、この汽水域研究会の会員から名著が生まれてくるのを待った方が早いかもしれない。



会員数 (2023年3月31日)

正会員：80名(±0)、賛助会員：5名(±0)、
学生会員：41名(±0)、計：126名
#カッコ内は2022年9月30日からの増減を示す

編集後記

ニューズレター第25号は3年ぶりの現地開催となった佐賀大会と、新春恒例の例会報告を中心にまとめました。アフターコロナへと社会が元通りしていく中で科学研究もそうなってほしいと願います(山)

汽水域研究会ニューズレター第25号 2023年3月31日発行 編集・発行：汽水域研究会

〒690-8504 島根県松江市西川津町1060 島根大学エスチュアリー研究センター内 汽水域研究会事務局

office.rgbwa@gmail.com 0852-32-6450 (phone&fax)